

酒とパソコンと少々ミルク

後退してたまるか！

成光 昭男

財務分析は分析の目的によって、収益性分析、生産性分析、成長性分析、効率性分析、安全性分析等に分類されます。

5月号では経営の安全性の指標のひとつである自己資本比率を紹介しました。6月号では成長性の指標についてお話ししました。

今月号では生産性分析をご紹介します。

収益を上げるには、土地や労働、資本と言った経営資源を基盤に生産活動を行います。この活動が順調であるかどうかを判断するのが生産性となります。一般的には下の式で表します。

$$\text{生産性} = \text{産出額} \div (\text{土地} \cdot \text{労働} \cdot \text{資本})$$

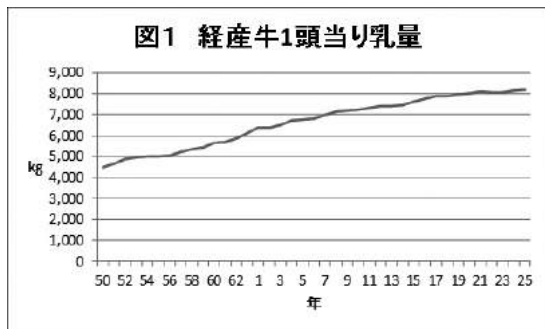
経営規模当たりの売上高や労働時間当たりの売上高、総資本当たりの売上高等で生産性を判断することになります。

酪経営規模当たりの売上高を農に当てはめれば、経産牛1頭当たりの生乳販売金額となるでしょうか。ただ、生乳販売金額は乳量と乳価によって決まってくるので、経産牛1頭当たり乳量の方が解りやすいし、良く使われていますね。

6月号で、経営の成長について「停滞は後退を意味する」と表現しました。

このことは、生産性にも当てはまります。

全国の経産牛1頭当たりの乳量の推移を見てみましょう。酪農家を始め、関係者の皆様のご努力の結果、昭和50年では4,464kgであったものが、平成25年には8,198kgにまで生産性が上がってきました。



資料：農林水産省「畜産統計」、「牛乳乳製品統計」

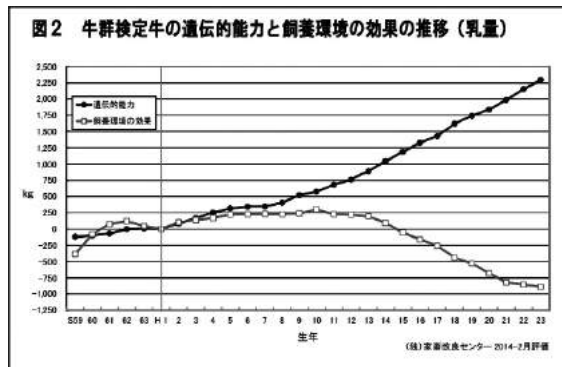
このように酪農の生産性は着実に伸び続け、

これからも伸びないといけない宿命を持っているのでしょう。

ところが、経産牛1頭当たりの乳量の伸びは年々鈍化する傾向にあります。

昭和50年から平成元年までの13年間は年平均137kg伸びてきたのですが、何と云うことでしょうか。直近の10年間では59kg、直近5年間では37kgまで伸びが鈍化しています。

平成24年8月号で、気になるグラフとして、牛群検定牛の遺伝的能力と飼養環境の効果の推移を紹介しました。その時は、飼養環境の効果が伸び悩んでいるとしましたが、新しいデータを見てみると、伸び悩んでいるどころか、明らかに低下しています。



資料：家畜改良事業団 後代検定事業のまとめ(平成24年度)

飼養環境効果とは、気象条件や牛舎環境、栄養管理、繁殖管理等、遺伝的能力を十分に発揮させるためのすべての自然環境や人為的環境の効果になります。

産乳量が低い時代には、あまり問題にならなかった飼養環境であっても、遺伝的能力が向上し、代謝量が大きくなった乳牛にとっては、産乳量にブレーキを掛ける大きなストレスとなっているのかもしれない。

具体的に何に取り組めば良いのか。それは個々牛群で違って来るでしょう。

今こそ「新しい取り組み」が必要な時です。酪農家の皆さん、JAの営農指導員、普及指導員等、酪農関係者が力を合わせて、この状況打破に取り組んでいきましょう。